

## 名大・水田名誉教授 ないがしろ施策批判

表題は中日新聞 9 月 25 日「特報」である。リードから一戦時中、陸軍の軍属としてインドネシアに派遣された社会思想史の水田洋・名古屋大名誉教授 (96) は戦争によって学ぶ機会を奪われた一人だ。戦後、その失った時間を取り戻そうと研究に没頭した。水田さん



さんはいま、人文社会科学系をないがしろにするような政府の施策を痛烈に批判する。「国民から判断力を奪いかねない。知性の未熟さが招いた戦争の反省を忘れたのか」

「戦争は友人たちの命を奪い、私たちから学問の自由を奪った。二度と起こしてはならないのに国はかじ取りを誤りかけていないか」「戦争は有能な先輩や学友の命を奪った。私は例外的に生き残っただけ。はからずも席を譲ってもらったのだから、がむしゃらにやらないわけにはいかなかった」著作や翻訳書は計 70 冊以上に上る。

社会科学に携わって 80 年がたつ。「物事を判断する力を身に付けるには必要な学問」と位置付ける。社会科学を学ぶには現在だけではなく、歴史に目を向ける必要がある。日本の過去の戦争の過ちは判断力の欠如が招いた。だからこそ、社会科学が大事なのだと信じてきた。だが、そうした水田さんの戦後の思いと逆行する動きが現れてきた。文部科学省は 6 月、全国の国立大に「人文社会科学系などの廃止や、社会的要請の高い分野への転換」に努めるよう通知した。水田さんは「愚かな施策。技術屋だけ育てばいい」と言っているに等しい。戦後 70 年、国は逆戻りする気か」と語気を強める。

「スミスは自分の体系に合わせて事物を進めようとする理想主義者を批判した。首相は集団的自衛権行使の要件の一つ、存立危機事態を『合理的に判断する』と言った。道理にかなわないことを合理的という首相は、社会科学を学び直した方がいい」と批判する。このまま、日本の人文社会科学は衰退の道をたどるのか。水田さんは安保法制に反対する学生グループらの活動を例に「60 年安保闘争では『岸を倒せ』一辺倒だったが、いまの若者は自分の言葉で発信している。広い意味での人文社会科学がまだ生きている証しだ」と期待を寄せる。

現在、水田さんは 19 世紀の英国人哲学者の原書を翻訳している。話題が過去の偉人に及ぶたび、「それもやらなきゃな」とつぶやいた。「健康のこつは批判精神」という 96 歳の老学者は、権力が間違った方向に行かないか、これからも監視を続ける。

(2015 年 9 月 29 日)